

こじれた恋のほどき方

S a y a k a & S h o i c h i

永久めぐる

Meguru Towa

termity



エタニティ文庫

目次

こじれた恋のほどき方

5

書き下ろし番外編
約束の海、
思い出の庭

343

こじれた恋のほどき方

プロローグ

——ピンポーン。

とある日の夕方。頼んでいた宅配ピザが届いたと思い、私、藤園さやかは勢いよく玄関のドアを開けた。

「げっ!!」

びっくりしすぎて、喉からカエルがつぶれたような声が出た。

ドアの向こうに、オレンジ色の玄関灯に照らされながら、見知った男性がひとり佇んでいたのだ。

見上げるほどの長身。驚くほど整った顔。軽く唇の端を上げて、意地悪そうに笑っている人物——

「よお、久しぶり」

この男は、ピザ屋さんじゃない。手にピザの箱を持つてるけど、断じてピザ屋さんじゃない。

私の幼馴染にして天敵。由緒正しい旧家、藤園本家の跡取り息子、藤園彰一だ。
「なっ!? なんでここに……」

彼と私は遠縁にあたるから、避けられない親戚付き合いはそれなりにあったけど……個人的に会うような機会は十年以上皆無だったはず。そもそもここ数年は、ヤツがアメリカに行っていたり、私が実家を出てこの家に住むようになって親戚付き合いにあまり参加しなかったため、顔を合わせていなかった。

だから顔を見るのは約三年ぶり? どうして急にやって来たんだらう?

そんな風に不思議に思っただけで、彼はさらに意味不明なことを言い出した。

「この家は俺が買い取ったから。そのつもりでよろしく」

——長年疎遠だった彰一の急襲により、私の生活は激変する……

一 嵐は突然やってくる

天敵の急襲から、さかのぼること十数分前——
 そのとき私は小学校からの親友、理奈に電話し、ガールズトークに花を咲かせていた。
 夕飯に食べようと時間指定で宅配を頼んでおいたピザが届くまで——そんな期限つき
 ではじめたおしゃべり。だいぶ時間に余裕があったはずなのに、それは予想以上の長電
 話になっていた。

それでもまだまだ話したいことがある。

私はいつい先日の出来事を思い出し、ため息をつきながら尋ねた。

「二十七歳で彼氏いないってダメなのかな？」

すると電話の向こうの理奈が『はいい？』と奇妙な声を上げる。

『さやかったら、なんなの急に』

「ん。この前、お母さんから電話があつてね。彼氏いないの？とか、いないなら
 お見合いしない？とか言われちゃって。もう、そういう歳なのかなって。衝撃
 だった」

そう。あれは衝撃だった。言われたことが嫌だったんじゃないやなくて、純粹に驚いた。

結婚したいと思う相手どころか、恋人ができる気配だつてない。結婚なんてまだまだ
 先のことというか、まるで異次元の話。色恋沙汰なんてきれいさっぱりなにもない私に、
 母のあの質問はぐっさり刺さって痛かった。

『なににない、さやかってはお見合いするの!？』

『しないよ！ その場で断った』

断ったものの、なんとなくもやしたもののが心の中に残っている。

私自身はいまのままがいいと思つていても、世間的には体裁が悪いのかも。考え
 れば考えるほど肩身が狭いというか、窮屈な気がしてくる。母は私に対して、好きなよ
 うにしなさいと言ってくれたけど、本当に断つてよかったのかな……なんて。

『断っちゃつたのかあ。——ねえねえ、そのお見合い相手ってどんな人？』

残念そうな眩きに引き続き、好奇心満載で聞いてくる。もう。理奈ってば面白がっ
 てるなあ。

「内緒！ 済んだ話なんだからいいじゃない」

母は『相手の方の写真見たけど、格好いいわよ。趣味は絵画蒐集ですって。さやか
 と話が合うんじゃない？』と言つていた。けれど、理奈にそんなこと教えたら、いま以
 上に面白がるに決まつてるので黙つておこうっと！

「あーあ。今後もお見合い話が舞い込むかもしれないと思うと憂鬱」
 『まあ、さやかはあの藤園家の一員だもん。そりゃあ、お見合いの話がきたっておかしくないと思うけど?』

「えーっ」

不満いっぱいで唇を尖らせたなら、小さく笑う気配があった。

『怒らないですよ。さやかが家のこと言われるの嫌いだってよく知ってるけど、でも事實は事実ですよ』

「それはそうだけど。でも……」

藤園家は、不動産管理業を中心に営む地元の名家。最近好調なのはホテル事業で、地元のホテルを一軒、旅館を三軒と、都内にも一軒ホテルを持っている。また文化事業にも熱心で、私設博物館をひとつ所有していたりする。

……と、どこか他人事な物言いになってしまふのは、うちが末席も末席の超一般家庭だから。ひいひいおじいちゃんが本家の三男か四男ってだけなんだから。

さらに、一族の多くが藤園系列の会社に就職している中、うちの父は理系の研究職に進み、まったく関係ない会社で働いている。だからさらに一族の中でもアウェー感が強いというか。

古い体質の一族なので、親戚付き合いはそこそこあって、我が家も益暮れ正月には本

家に顔を出している。系列会社の祝賀会や身内のパーティーに顔を出さなきゃいけないこともたまにあるけれど……ああいう場所は、はつきり言って苦手だ。なぜなら、そういう場所に顔を出すと、藤園家と関わりを持ちたい人たちに声をかけられるから。でも、さつきも言ったけれど、うちには一族内での発言力もないし、私をどうこうしても意味ないと思うんだけどね!

周囲の人たちは、藤園つて苗字だけで、私に対しても勝手に期待したり落胆したりする。それが嫌で、ひとり暮らしをはじめてからは故郷に寄りつかなくなっている。

「あああああ、めんどくさい」

『まあまあ、そう嘆かない、嘆かない。藤園の家に生まれたから、大好きな洋館でひとり暮らしできてるわけでしょ?』

「うっ! それは……そうなんだけど……」

理奈が正しい。言い返せなくて、返事の代わりに冷めたお茶をひと口飲んだ。

私がいま住んでいるのは、本家の当代当主の妹、沙智子おばさまの家だ。

数年前、イタリアへの赴任が決まったおじさまと一緒に、おばさまもあちらへ行ってしまった。それで、おばさま夫婦には子どもがいなかったため、家の管理を頼める人を探していたらしい。

そのころ私は家から少し遠い美大に、片道二時間以上かけて通っていた。最初はなん

とかなるだろうと思っていたのだけれど、やっぱりきつくて、両親と相談して、大学の近くにアパートを借りてひとり暮らしをしようと考えていたところ、この話が舞い込んだ。この家から大学までは電車で三駅の距離。即座に管理人に名乗りを上げ、その後の話はとんとん拍子に進み、いまに至る。

この家は大正時代に建てられたコロニアルスタイルの洋館だ。濃緑の屋根に白い壁。鎧戸や窓枠は淡い緑色でちょうどいいアクセントになっている。コロニアルスタイルの特徴ともいえるペランダの柱も淡い緑で、全体的に可愛らしい雰囲気だ。規模は小さいけれど、あちこちに意匠が凝らされている。古い家だからちよつと不便なところもあるものの、水回りはそれなりに改装してあるし快適。庭も家の中も、定期的に専門業者の手を入れることになっているので、管理人って言ったって大したことはしていない。普段の掃除くらいだ。

大学卒業後もそのまま住まわせてもらって、かれこれもう五年。こんな素敵なお家に住めて、毎日が夢みたいに楽しい。

『そこに住めて楽しいんでしょ？ だったら少しは我慢しなさい』

「はあーい」

頭ではわかっているんだけどな。子どものころ色々あったから、感情面ではまだ割り切れていない。親戚のみんなが嫌いだとかそういうことじゃないんだけど……

——あ、違う。ひとりだけ嫌いな親戚がいるわ。同い年のアイツ。

なんて思い出していると、理奈が『そういえば』と話題を変えた。

私は物思いに耽けるのをやめて彼女の声に集中する。

『ねえ。うちのホテルのオーナーの噂、聞いている？』

すごいタイミングで聞いてくるから、私は思い切り顔をしかめた。

理奈の勤めている藤園グランドホテルはうちの本家が経営しているホテルのひとつ。

で、オーナーは、まさにいま私が思い出していた大嫌いなアイツ、藤園彰一。本家の長男で、私の初恋の相手で、それでもって私の天敵。あんなヤツが初恋の相手なんて、黒歴史もいいところだ。幼稚園時代の私は本当に男を見る目がなかったね！

「彰一？ 知らない、あんなヤツ！ 私がアイツのこと嫌ってるの知ってるでしょ？ そんな話題ふらないで！」

『うーん……。まあ、ねえ。オーナーって、さやかにだけ意地悪だったよねえ。それってさ……』

次に理奈が口にする言葉はわかりきっている。『さやかの方が好きだったんじゃない？』だ。

「絶対に違うから！」

先手必勝。言われる前に否定しておく。このやり取りはもう何度目になるか数えきれ

ない。

「え。そんなことないってば。小学生くらいの男の子ってさ、好きな子には意地悪しちゃうものじゃない？」

と、不満そうな返事をしてくるのもいつものこと。

「彰一ってさあ、なんであんな嫌なヤツに成長しちゃったんだろ……」

言っても仕方ないことだけと、やっぱりため息が出る。

幼稚園時代の彰一は、ちよつと泣き虫だけど、優しくて、物知りで、男勝りだった私とは対照的に大人しい子だった。そんな私たちがどうしてウマが合ったのかわからないけど、とにかく当時はすごく仲がよかつたし、私は彼に恋のような感情を抱いていたけれど、小学校に上がった途端に彰一はとんでもない意地悪野郎に変わってしまった――

短い春休みを挟んだだけで、なんでそんなに変わっちゃったのか信じられなくて、最初は呆然とした。意地悪を言われたり、されたりするたび、『本当のショウウちゃんはこのことしない。なにか理由があるんだ』と思って我慢してたけど、それが二年生になっても三年生になっても一向に直る気配がない。四年生に上がるころには沸々と怒りが湧きはじめ、五年生では喧嘩に明け暮れた。そして小学校を卒業するころには、埒が明かないからもう関わり合いになるのはやめようと達観するに至った。

煌びやかな取り巻き連中を引き連れて、いかにも名家のお坊ちゃま然とした彼の姿は、いまでもうんざりするくらいはつきり思い出せる。

『お前なんかにできるわけがない』

『そんなこともわからないのか、呆れたヤツだな』

『邪魔だ、引っ込んでろ』

なんて暴言にはじまり、ことあるごとに張り合ってくるわ、突っかかってくるわ、面倒くさいことこの上なかった。泣き虫時代の彼をよく知っている私の存在が疎ましかったのかもしれないけど、同じ幼稚園だったのは私だけじゃないし、理由がわからない。ことあるごとにこんなことを言われ続けたら、誰だって嫌いになるよね!?

偉そうに腕組みして『お前は黙って俺のうしろにいればいいんだよ!』なんて小馬鹿にされたときは、思わずぶん殴っちゃったよね。まったく悪いと思わなかったので謝らなかつたから、親にも先生にも思いつきり叱られたけど、いまだに後悔はしてない。

その後、私は地元の中学へ、彰一は中高一貫の名門私立学校へ進んだ。これでようやくヤツの意地悪から解放されると思っただけど、悲しいかな親戚つきあひまでは断ち切れない。顔を合わせることに喧嘩になる始末で、年を追うごとに険悪さは増していった。

極めつけは高校一年生で、私にはじめて恋人ができたとき。相手はひとつ上の二年生

で、同じ学校の先輩だった。格好よくて、年上らしい落ち着きがあつて、物腰が柔らかい。そんな人に告白されたことで、恋愛のれの字も知らなかった私は舞い上がった。

いまになって思えば、自分の浮かれっぷりが恥ずかしくて床に頭を打ちつけたけれど、当時の私は我が世の春を謳歌していた。勉強はおざなりで、部活だってサボりまくり、全部が彼中心に回る日々。

ところが、そんなこんなどで迎えたクリスマスイブに、突然別れを切り出されたのだ。心は悲しみに沈んでいたけれど、周りに心配をかけたくなかったし、本家の集まりは絶対参加だから、私は仕方なく藤園家の新年会に参加した。

そのとき本家のお屋敷の廊下で、彰一に呼び止められた。そうして振り返った私に、ヤツが言い放つたのは……

『アイツの素行の悪さを、お前は知らなかったのか？ 無知は罪だな。それとも恋は盲目ってやつか？ どっちでもいいが、藤園の名に傷をつけるような真似はするな』

あとから風の噂で聞いたところによれば、確かにその元カレはあまり評判のいい人じゃなかった。彰一の言うことは正しかったのだ。でも、正しいと理解していても、彰一が私の恋愛にまで口出ししてきたことが腹立たしくて、素直に反省できなかった。最後の一言がどうしても受け入れがたかったから。

藤園の名に傷をつけるな。

その一言に、彰一はもう遠くて、相容れない存在になってしまったんだと確信し、そのとき私はようやく『幼馴染のショウちゃん』と決別したのだった。

高校卒業後、ヤツはアメリカの大学へ進学し、そこを卒業してからも一年間は現地の会社でインターンシップをしていたから、会う機会はほとんどなくなった。けれど、あの日の腹立たしさと落胆は昨日のことのように蘇る。

——なんてことを一瞬で思い出す。ムカムカとモヤモヤがビークに達した私は、膝に抱えていたクツションを殴って八つ当たりした。

「ああ、腹が立つ！」

『もー、相変わらずなんだから。いい大人なんだし、そんな態度取らないの。——それでね。オーナーなんだけどね、最近、お見合い攻撃が酷くて閉口してるらしいよ。ま、片っ端から断ってるみたいなんだけど』

話題をふるなって言ったのに、全然聞いてないよ、この人！

「へえー」

適当さ丸出しの相槌を打つても、理奈はまったく気にしないで続ける。

『それだけならまだよかったんだけど、一昨日だったかな？ 仕事だって言われて指定された料亭に行ったら、なんとお見合いの席だったんだって！ だまし討ちみたいなやり方に相当腹を立てたみたい』

まあ、そんなことされたら誰だって怒るよね。彰一は嫌なヤツだけど、ちょっと同情した。

『それでね、昨日一日で溜まってた仕事片づけて長期休暇をもぎ取って、今日からどこかに雲隠れって噂よ！』

「へえ……。まあ、休暇が終わったら帰ってくるんじゃない？」

さつきと同様、適当に答える。考えたって真相はわかりっこないもの。

『そんなものかなあ。……それにしても、さやかもお見合い、オーナーもお見合い、かあ〜〜』

電話の向こうで、大きなため息が聞こえた。

——そのとき、ピンポン、とインターホンが鳴った。

現代的な電子音はこの家に似つかわしくないなあと常々思っているけど、ないと不便だし、仕方ない。古風な洋館で快適に暮らすためには多少の妥協が必要なのだ。

「ごめんね。ピザが届いたみたい」

「ん。じゃ、またね〜」

「はい！ またね！」

通話を切り、私はテーブルの上に用意しておいた財布を掴んで玄関へ向かった。



「ごめんなさい。お待たせしました！」

そう言いながら、俯き加減で勢いよく玄関のドアを開けた。

……ん？ いつもならドアを開けた瞬間に『毎度どうも！』って元気な挨拶があるはずなのに。今日は静かすぎる。

訝しんで顔を上げると、そこには男性がひとり佇んでいた。

「げっ!!」

びっくりしすぎて、色気のない声が出た。

唇の端を軽く上げ、意地悪そうな笑みを浮かべる長身の男。コイツは……！

「よお、久しぶり」

私の幼馴染にして天敵。本家の跡取り息子の藤園彰一だった。

『長期休暇をもぎ取って、今日からどこかに雲隠れって噂よ！』

さつき理奈が言っていた言葉が頭をかすめる。

……え!? 雲隠れしたはずの人間が、なんでここにいるの。

混乱する頭を必死に働かせて考えるけど、当然彰一がここに立っている理由なんて思いつかない。

……もしかしてコレ、幻覚なんじゃないの？

理奈と話しているときに、彰一のことなんて思い出したから、ついうつかり幻を生み出しちゃったんだわ……！　そう！　それに違くないよ！！

うんうん、私、ちょっと疲れてるのかな？　いったんドアを閉めて、深呼吸して、そうしてもう一度ドアを開ければ、綺麗さっぱり消えてるはず……！

そう信じて、いましがた開け放った玄関ドアのノブを掴んで閉め……ようとしたんだけど、それよりも早く、招かれざる来訪者にドアを押さえられてしまった。渾身の力を込めて引っ張っても、ドアはびくともしない。なんて馬鹿力なの、コイツ！

「この家は俺が買い取ったから。そのつもりでよろしく」

憎たらしいくらい端整な顔をニヤリと歪めて、彰一は私の横をすり抜けた。

「ちよつ……なに言ってるの!?　意味わかんないんだけど!」

「うるせえな。引っ越しとかは追々するとして、ひとまず今日から二週間、俺はこの家で過ごすから。あ、お前は今後も、特別にこの家に住まわせてやるから安心しろ」

「あ、それはありがと……じゃない!　急にそんなこと言われて、誰が信じるかってのよ!」

「説明はあとあと。ほら、お前の晩メシ。受け取っておいてやったぞ」

ピザの平たい箱をずいっと差し出されたので、私は慌ててそれを受け取った。

そして私が呆気にと取られている間に至近距離まで近づいていた彰一は、私の両肩をがしっと掴んだ。

「……………」

衝撃のあまり声が出なかった。次の瞬間、手から大事な晩ごはんが滑り落ちる。

ああ、わが愛しのマルゲリータピザ、チーズ増量!　いつもなら転んだって死守するのに、いまは体が硬直して指先ひとつ動かせない。

ピザ箱がコマ送りのようにゆっくりと床へ落ちていくのを見守るしか……

「……っ！　あつぶねー!」

一瞬なにか起きたのかわからなかった。

彰一が素早く屈んで、ピザの箱をキヤッチしてくれたいらしい。

「まったく、相変わらずトロいな。熱々のチーズがたっぷりだったピザなんだぞ。万が一、落とした拍子にふたが開いて中身を被ったら大変だろうが!」

彰一はおもむろに私の手を掴み、ぺたぺた触って無事を確認してくる。こんな風に手を握られるのは幼稚園以来で、気恥ずかしい。

——たしかにピザはでき立てだろうけど、配送の間に少しは冷めているはずだ。

ちよっと大げさすぎやしない？

私はなんだか居心地が悪くなって、彰一の手を振りほどこうとした。けれど、強引に手を引つ張られて叶わぬ。

「ちよ！ さつきからなんなのよ」

足を踏ん張りつつ、私の手首を握る手をペしペし叩いた。

彰一に会うと、だいたい彼のペースに乗せられて調子が狂いっぱなしになる。ちよどういままいたいに。それが腹立たしくて仕方がない。

「そーんな可愛らしい抵抗されても、俺には効果なんてないぞ？」

ますます意地悪な顔で笑う。コイツが可愛いつか言っても、ぜんっぜんいい意味に聞こえない。

口をへの字に曲げて睨み上げる私を、彰一は涼しい顔で見下ろしている。

「なんなら抱っこで運んでやってもいいが？」

「な、ななななっ!？」

「冗談だ。おまえ面白いくらいなんでも本気にするのな」

あははは、と笑いながらあっさり手を放すと、私を置いてダイニングルームに入ってしまった。

「ほら、冷めないうちに食うんだろ？ 早く来い」

先に歩いていった彰一がダイニングから顔を出して私を急かす。

「い、言われなくてもわかってるってば！」

私も慌ててダイニングルームに向かって歩き出した。



数十分後。

ピザを食べ終えた私は、リビングルームのソファに腰かけながら、ほうじ茶をすすっている。ああ、美味しい。熱々に淹れて冷ましながら、ちびちび飲むのがいいんだよね。

——なんて考えるのは、ちよっとした現実逃避だ。

彰一が勝手に上がり込んでしまったから、仕方なく一緒にダイニングルームで夕食をとった。そしたら、どうい風風の吹き回しなのか、彰一に甲斐甲斐しくお世話をされてしまつて、とても不気味なのです。

『さつきピザを落としかけたときに、手首をひねったりしたかもしれないから、やつぱりお前は大人しく座ってろ』

『え、あんなの全然大丈夫だつて……』

『うるさい、黙って俺の言う通りにしろ。お前は一步も動くな』

口ぶりは横柄おうびそのものなのに、やれ取り皿だ、タバスコだ、麦茶だ……と次々に目の前に用意された拳句あけく、ピザまで取り分けてくれた。

いったい、なんなのコイツ。

あまりの胡散臭うさんくささに睨にらんだけれど、彰一は涼しい顔でお茶をすすっている。

——って、いつまでもまったりしてる場合じゃない。さっきの爆弾発言について詳しく問い詰めねば。

私はそう思い、湯呑みをローテーブルに置いて居い住ずまいを止す。

「さて、彰一。そろそろ本題に入ろうよ」

「本題って……？」

さもわからない、という顔をしているところが小憎こげらしい。絶対わかっているくせに！ けど、ここでいちいち突つつかかってたら進む話はなも進まない。

大人になれ、自分。大人になれ、自分。

「決きまつてるでしょ。さっき彰一が言い言いつてたじゃない。この家は俺おれが買かい取とつたとか、二週間ここに泊とまるとか。私、そんな話おばさまからにも聞いてない！ 急に言いわられても困こるよ！」

「さっきも言いつたろ？ この持ち主は俺だ。お前の意思なんて関係ない」

ココノ モチヌシ ハ オレ ダ？

私の聞き違いであつてほしいと心から願ねがっていたのに。やっぱり……そうなの？

彰一のことだから、私に嫌きらがらせするために性質たの悪い冗談じやうだんを……って。でも、ここ数年会あつてなかったのに、わざわざ意地悪いぢあくするために訪たづねてくるなんて暇ひますぎるか。そうはいっても、彰一の家はすでにたくさんの不動産ぶつたんを持っているし、この家を手てに入いれたい理由りゆうも思おもいつかない。じゃあ、やっぱり私の住す処かを奪うばつて嫌きらがらせするためだけに大金おほきをかけて!? お金持かねもちちの戯たわぶれなの!?

突とつ飛びな妄想もうそうが頭あたまを駆かけ巡めぐった。

「……嘘うそでしょ？」

「嘘うそだと思おもうか？」

と逆に問とわれると答こたえに困こる。藤園家は親族内しんしゆくうちで家の一、二軒けんくらい簡単かんぱんにあげたりもらったりしそうだ。まあ、ありえない話はなではない。

「本ほん当とうだという証しやう拠きだつてないでしょ！」

私はじっと彰一を睨にらみ、彰一もまた威い圧あつ感かんたつぷりな顔かほで私わたしを見返みかへしてくる。

そんな緊張てんじやうがみなぎる部屋へやに、壁掛かけ時計とけいのカチコチという呑のん気きな音ねだけが響ひびき渡わたっている。

——膠着状態を破ったのは一本の電話だった。小さめの音量に設定しているけれど、完全に油断したところにベルが鳴ったから、びっくりした！ ドキドキと早鐘を打つ胸を手で押さえて席を立つ。彰一が不機嫌そうに舌打ちする姿が見えたけど、無視、無視。「はい、藤園でございます」

『さやかちゃん？ 私。沙智子よ。お久しぶり。元気にやってる？』

背後でソファがきしむ音が聞こえる。振り返ると彰一がソファから立ち上がるところだった。

ますます不機嫌そうに曲がった彼の唇を見て、ピンときた。私とおばさまが話す都合悪いんだね。やーっぱりなんか隠してた！

「はい。こちらは元気にやっています。あの、ちょっとお聞きしたいことがあるんですが……」

『彰一くんのことかしら？』

即座に彰一の名前が出てくるなんて、ますます怪しい。

「そうです」

と言った途端、顔に影が差す。不思議に思っとうしろにクルッと向き直れば、体が

くっつきそうなところに彰一が立っていた。驚いて喉の奥から変な声が出そうになるの
をかるうじてこらえる。

さっきも思ったけど、長身にくっつかれると威圧感あるんだってば！

心の中で悪態をついてヤツと離れるべく一歩後退した。すると彰一もその分だけ距離を詰めてくる。おまけに電話を貸せと言わんばかりに右手を出してるんだけど……素直に従うわけないでしょ！

彼の手をかわして、何事もなかったようにおばさまと通話を続ける。

「なにか事情をご存知でしたら教えていただきたくて……」

手で『あっちへ行け』の合図をするけど、ヤツは一向に諦める気配ナシ。

実力行使と言わんばかりに手を伸ばしてくるから、また一歩後退。ついでにヤツの手を叩き落とす。手加減はしたけどそれなりに痛かったらしく、彰一は「いてっ」と小声で呟いて怯んだ。

『あらあら。事情もなにも、あなたを説得に行ったんでしょ？』

「説得？」

なんの説得？ 話が見えない。

『もしかして、彰一くんったら、まだなにも話してないの？ ダメねえ』

沙智子おばさまは小さな子どもをたしなめるような口調で言った。ちらりと横目で彰

一を見ると、観念したのか私から少し離れた場所に立ち、仏頂面ぶつどうめんで腕組みをしている。「申し訳ありませんが、最初から教えていただけませんか？」

『あなたにも関わることなのに、説明が後回しになっちゃってごめんなさいね。私ももうてっきりさやかちゃんも知ってる……』

と前置きをしておばさまが話してくれたのは、こういうことだった。

もともとおじさまの異動に伴って渡ったイタリア。住んでみたら思いのほか快適だし、現地でおばさまが立ち上げた事業も順調で、日本に戻るのをためらいはじめたらしい。

おじさまが定年したら戻ってくるのが当初の予定で、私もそう聞かされていた。おじさまの定年はもうすぐ。昨年あたりから、そろそろこの家を出て行かなきやいけないなあと漠然ぼくぜんと考えていたのだ。なので、帰国したくないという沙智子おばさまの発言は寝耳に水だ。

「イタリアに移住しちゃうんですか？」

『うーん。そうねえ。移住……まではいかななくてもね。できるだけ長くこちらにいたいわね。それこそ、元気ならあと十年くらい。そうなると気がかりなのはその家のことよ。さやかちゃんだって、そう遠くないうちに出て行っちゃうでしょう？ 恋人ができたり、結婚したりで』

あ……。そんな予定はこれっぽっちもないですけどね。あははははは！

「やー、お恥ずかしながらそんな予定はなくて……」

『あらあら。そんなこと言って！ 恋なんてね、電光石火でんしつせうかよ。いまその気がなくなつて、明日にはどうなっているかわからないんだから』

語尾にハートマークがつきそうなくらい明るい口調で言い返されて、私は「はあ」と締めまらない相槌あひづちを打った。

『私の言うことが信じられない？ ふふふ。そうねえ、一年……いいえ、半年後にも同じことが言えるかしら？ 楽しみねえ』

沙智子おばさまは含み笑いしながら、そののたまう。

なんでそんなに確信めいた口調で言えるんですか、おばさま！ 彼氏いない歴二ケタに突入したこの私に！

「そんな急に春が来るわけじゃないじゃないですか、あははは……は……は……」

自分で言っておきながら、心にぐっさり刺さる。うう、胸が痛い。

『ふふ。いまはそう思っておきなさいな。——話が脱線しちゃったわね』
渾身の自虐じぎやくは、あっさりかわされてしまった。

『数か月前にその家を売ってほしいとおっしゃる方から連絡が来てね。そのとき、はたとその家をどうするか考えなきやいけないと気がついたの。主人も私も自分たちのことで頭がいっぱいで、すっかり忘れてたのよ。恥ずかしいわ。これから先、何年空あき家に

するかわからないでしょう？ 放置するより、大切にしてくれる方にお譲りしたほうがいいんじゃないかと思って』

「じゃあ、その方に？」

『いいえ。急なお話だったし、そのときは決心がつかなくてお断りしたわ。物腰の柔らかい、感じのいい男性だったのだけれど……。ただね、その電話がきっかけで家の処分を考える気になったの』

そんなことを義姉である百合おばさまに話したところ、その息子である彰一が買い取りたいと名乗り出たらしい。

彰一のことによく知っているし、他人に売り払うよりは気持ちも楽だ。だからその申し出を、条件つきで了承したんだと言う。条件と言うのは、「二週間以内に、管理人として住んでいる私を説得し、新しい家主として認められること」だそうだ。

「二週間、ですか」

『そう。私、二週間後に一時帰国するから。それまでに条件をクリアしなさいってこと』

管理人とは名ばかりで、沙智子おばさま夫婦の厚意で住まわせてもらってる私のことなんて気にしないでいいのに。いまずぐに出て行けと言われたらそりゃあ困るけど、でもおばさまの邪魔にはなりたくないし、期限を区切ってもらえれば引越すし。条件な

んてつけて話をややこしくする必要なんてないはず。そう思って尋ねると――

『ちょっと事情があつて……。ね。いまは話せないけど、いつか全部話すわ』

と含み笑いをするだけで、それ以上は教えてくれなかった。

「その『いつか』って、いつですか」

『うーん、そうねえ。早かったら二週間後？ 遅かったら……。さて、いつになるのかしら？』

「えー……」

不満たらたらで呟くと、おばさまはころころと上品に笑う。

『上手くいくといいわね？』

「あの、話が見えないのですが……」

『いまは見えなくていいのよ！――あら、大変。もうこんな時間だわ！ さやかちゃん、ごめんなさいね。二週間後に会えるのを楽しみにしてるわ！ じゃあね』

プツッ！

「あ。切れた」

通話の切れちゃった電話をまじまじと眺めるけど、それでふたたび電話がつながるわけではない。

忙しそうだったし、かけ直すのは気が引ける。

「ま、いつか。二週間後に会えるんだし」
 それに冷静になって考えてみれば、私はただの居候いこうろう。家主の事情にどつぶり首を突っ込んでいい立場じゃない。この家の譲渡じょうとに口を出す権利なんてないのだ。誰が家主になったとしても、おばさまの意思に従うだけ。だから、悔しいけど私は彰一を家主として認めないわけにはいかない。だって、この家の譲り手がいなくなってしまうたら、困るのはおばさまだもの。

……とはいえ、ふたつ返事で彰一を家主と認めてしまうのは癪しやくだ。二週間後におばさまは帰ってくると言っていたし、そのときまで彰一を大いに焦じらしてやろう。二十年来の鬱憤うづがを少し晴らさせてもらうんだから！

悪うだくみを思いついた私は、彰一に見つからないよう忍び笑いをしつつ終話ボタンを押した。



受話器を戻し、元の席に着く。
 目の前には不機嫌そうな彰一が座っている。

私から電話を奪うことを断念した彼は、早々にソファに戻っていたのだ。

「家主じゃないじゃない」

「ほぼ決定なんだから、そう名乗っても問題ないだろ」

「騙だましやがって、このお……」

「人聞きが悪いこと言うな。計略だ、計略」

「似たようなもんでしようが！」

ぜえぜえと肩で息をする私を企み顔たくらで眺める彰一に、腹が立った。

こんな性格だつていうのはわかってたはずなのに、うっかり騙だまされた自分にもイライラする。なかば八つ当たりを込めて、

「言いつけてやる。百合おばさまに言いつけてやるっ！」

と人差し指を突きつけた。

けれど彰一はどこ吹く風だ。ふふん、と人を小馬鹿にしたように鼻を鳴らす。

「つ、ついでに親戚のおばさま連中にもあなたの居場所、連絡しちゃうんだから！ 彰一、いまお見合い攻撃がすごいんでしょ？ それで今日から雲隠れなんでしょ？ 知ってるんだから！ お見合いの話たなしを携たずえたおばさまたちに聞まれて、困ればいいのよっ！」

「おまえなあ……。どっからそんなデマを仕入れてきたんだよ、まったく！」

「え？ デマ？ そうだったの？」

「次々に縁談を持ちかけられて、辟易へんえきしてたのは事実だが、今日から休暇を取ったのは、

雲隠れのためじゃない。おまえに家主と認めさせて、この家を手に入れるためだ」

思いっきり呆れられてしまった。……そうだよ。いまおばさまから聞いたばかりなのに。じゃあ、理奈が言ったのは勘違い？ まあ、オーナーのゴシップネタなんて、従業員たちの好きな話題だものね。そういうデマが広がっていても不思議はないのかな。情報源が理奈だってバレたら、彼女になにか悪い影響があるかもしれないから絶対黙っていなきゃ！ と身構えたけど、彰一はそれ以上追及してこなかった。

そのかわり、なにやら含みのある顔つきになって、口を開く。

「よし、わかった。おまえが告げ口したいと言うのなら構わん。誰にでも言えばいい。だがな。もし親戚連中に俺の居場所がばれた場合……」

「場合……?」

彰一が急に声を低くした。続く言葉聞くのが怖くなって、喉がごとりと鳴る。

「かましいとおばさま連中が見合い写真持って押し寄せてくるぞ。そのときはたぶんおまえの分までちゃっかり持つてくるだろう。いや、持つてこないようなら、俺がおまえの分も頼んでやろう。どうだ、一緒にあの見合い攻撃受けてみるか?」

「いやあああああああ！ 返して！ 私の静かな日常を返して！」

母からチラッと言われただけでうんざりしたのに、それが大挙して……なんて考えただけで眩暈がする。

「な? 嫌だろう? だったら、誰にも連絡せず、大人しく二週間、俺を泊めるのが得策だぞ」

「……う、それはそれで嫌なだけで……」

本音を言えば、彰一をいますぐ追い出してしまいたい。でも、そんなことをしてこの譲渡話が流れてしまったら、おばさまを困らせてしまうし……ああ、なんて厄介なの!

「おいおい。つれないこと言うなよ。おまえと俺の仲だろ?」

「それどんな仲」

悪縁? 天敵!? なんにせよ、ろくなもんじゃない。

「仲良しの幼馴染」

少しも悪びれずに言う彰一に、げんなりした。

「それ、いつの話よ。仲良かったのなんて幼稚園までじゃない。あとはいじめっ子だったクセに」

どの面下げて仲良しなんて言うのかな、コイツは。

「小学生の意地悪なんて……ほら、わかるだろ?」

「え、なにわかんないわよ！ はっきり言いなさいよ!!!」

むっとしながら言い返すと、彰一はばつが悪そうな顔をして頭をがりがり掻いた。

「おまえ……そんなこと、言わせるなよ。もういい」

そう言って、ぷいっとそっぽを向いてしまった。

な、なによ、怒りたいのは私のほうなのに……!

「そ、そうだ! なにもここに二週間泊まらなくても、あんたが毎日通って私を説得すればいいじゃない」

我ながら、いいこと思いついた!

「嫌だね。俺が訪ねてきてからの一連の行動を見ていて確信した。お前をひとり暮らしさせるなんて危なっかしいこと、これ以上できない。管理人の生活を監督かんとくするのも、家主としての務めだ」

そう言ってなぜか、偉そうにふんぞり返る彰一。身に覚えがなさすぎて、一瞬呆気あっけに取られてしまった。

「……はい? まだ認めてないし! 第一私、危ないことなんて、まったくしてないじゃない」

彰一が訪ねてきてから……ピザを食べただけなのに、どこに危ないことがあつたって言うのよ。

「まず、インターホンが鳴ったとき、モニターも確認せずに玄関を開けるなんて不用心すぎる。俺だったからよかつたものの、もし訪ねてきたのが悪意を持ったヤツだったらどうするつもりだ!」

「へ?」

「危ないだろう!」

いやいや、さっきのはたまたまだから!

「いつもはちゃんと確認してるって。ほら、さっきは宅配を頼んでたし、ちょうど配達予定の時間だったし? つい……」

「つい、だと?」

誰だっけついやちやうことってあるじゃない? そんなに目くじら立てなくてもいいのに。そう呑気のんきに思う私とは対照的に、彰一はますます眉をひそめる。

「そ、そう。つい、だよ。つい!」

上目づかいでそーっと様子を窺うかがうと、彰一は最大級に怖い顔をして腕を組み、ソファにふんぞり返っている。雰囲気だけで言えばこめかみあたりに青筋がビキビキ立ってそう。実際は立ってないけど。

魔王がこの世にいるとしたらこんな感じかな。なんて場違いなことが頭をよぎった。ついでにシュールベルトの『魔王』が頭の中で鳴り響く。

「この馬鹿! 『つい』じゃない! おまえ本当に危機感薄すぎだ!」

ひー! 特大の雷が落ちてきた。つていうか、なんでこんなに怒るの!?

「いいか、その油断が命取りになるんだ。自分だけは大丈夫、自分だけは安全、どうし

てそう思える？ 根拠なんてあるか？ ないだろう？ なにか起こってから後悔しても遅いんだぞ！ いいか。今後はちゃんとモニターで確認してから玄関を開ける」

「は、はい！」

劍幕に圧されて素直な返事が口をつく。いつもみたいに反発する気も起きない。

「それからビザを落としそうになったとき！」

「またその話!？」

火傷したら……とかなんとか。心配しすぎだよ。仮に少しくらい火傷したとしても、よく冷やしておけばすぐ治るでしょうに。

「お前にそんなこと言う権利はない。どうせ普段から、熱いお茶をこぼしたりしてんじゃないのか？」

「うっ、それは……」

なんでわかるの!? たしかに、考え事とかしてると、つい湯呑みをひっくり返しちゃうことがある。

「ほら、やっぱり。お前のそういうとこ、小さいころと全然変わってないんだな……」

そう言いながら私を見る彰一の目は、なぜだかとても優しく、幼いころのシヨウちゃんの思い出が胸をよぎり、少だけ胸が苦しくなった。

「と、いうわけで。俺はお前を監視するためにこの家に住むことに決めた。異論は認め

ない。逆に聞くが、お前は どうして俺と一緒に住むのがそんなに嫌なんだ？」

「……この暴君！ いままでひとりで気ままにやってきたのに、絶対に嫌！ それに、み、未婚の男女がひとつ屋根の下でふたりつきりって、そんなのよくないに決まってるじゃない!!」

彰一は一瞬ぼかんとして、それから得心がいった様子で頷き、最後に呆れたようなため息をついた。

それに対して「なによ、その態度！」とさらに腹を立てた私に向かい、憐れむような目を向ける。

「……あのなあ、さやか。俺を見くびってるのか？ おまえには悪いが、いきなり襲うほど飢えてないんだよ。ご期待に添えなくて申し訳ないな」

「な！ ばばば馬鹿なこと言わないでよ！ なにがご期待よ！」

なんなのコイツ！ なんでこんなこと言いながら、色気たっぷりの流し目をくれるかな！

「……ふんっ、いいわよ。そこまで言うなら、この勝負受けて立とうじゃない！ 二週間を私を説得してみなさいよ!!」

「言ったな」

——あ。

ニヤリと笑う彰一の顔を見てはっとする。ああ、私の馬鹿……！　こういう乗せられやすい私の性格を、コイツは熟知してるんだった！！

「よし。これで管理人である、さやかの了承も取れたし、今日から二週間、じっくり说得させてもらうから。よろしくな」

有無を言わせぬ口調。いまさら「さっきのは売り言葉に買い言葉でつい……」なんて言って、弱みを見せたたくない。意地っ張りな自分の性格が恨めしいけれど、彰一の勝負にはどんな小さなものだって負けたくない。

私は覚悟を決め、彰一に改めて宣戦布告した。

「望むところよ、かかってきなさい！」

——こうして私の本心とは裏腹に、彰一との期間限定同居が決定してしまったのだ。た……



それから私たちは共同生活をする上での最低限のルールを話し合った。いま思いつかないものは思いついたときに改めて話し合えばいい。

その話し合いの最後に、彰一の使う部屋を決める。

「俺はどの部屋を使えばいい？」

「部屋は二階の一番東を使って。階段を上がって左のつきあたり」

反対側のつきあたり——つまり西の角部屋が私の部屋だから、一番遠い部屋を指定した。

「わかった。その部屋を使わせてもらう」

「じゃ、そういうことで！」

話は終わったし、さっさと自分の部屋に引きこもってしまおう。なるべく顔を合わせないようにして過ごせば、二週間なんてきつとすぐよ。そう思いながら中腰になったところ——

「待てよ」

と手を掴まれた。

「なに？」

座りなおすのは癪なので、そのまま振り返って尋ねる。

「話はまだ終わってない。座れ」

「ほかに話すことなんてないでしょ」

「いいから座れ」

ぐいっと手を引かれて、仕方なくもう一度ソファに腰を下ろした。

「この家の窓はすべて防犯ガラスなんだろうな？」

「そうだって聞いてるけど？」

答えると彰一はなにか考えるように視線を宙に彷徨わせながら、ぶつぶつと独り言をこぼす。その言葉の断片を拾うと……

「そうか。とするとあととは……とりあえずホームセキュリティか。細かいところはゆくりチェックすればいい」

こんなことを言っているようだ。

え、ホームセキュリティ!?

「ちよつと待って。ホームセキュリティって!? そんなもの、どれだけ費用がかかると思ってるのよ!」

「おまえ……」

頭痛がするともいいいたげに、彰一は額を押さえた。

「あのなあ、そんなこと気にするなよ。住んでいる人間の安全のほうが大事だろうが」

「気にするよ! お金を気にしなくて済むのなんて、あんたんちぐらいのお金持ちだけだよ!」

本当に、彰一つてばどうしちゃったの!? 口が悪いのと、私をからかってくるのは昔のままだけど……なんていうか、心配性すぎるというか……

なにか裏があるんじゃないの!? 疑いの目でじーっと見ると、彰一は疑われたのが不本意だと言いたげに唇を尖らせていた。

「なんだよ、ほかにも言いたいことがあるなら言えよ」

「ねえ、彰一。ここ数年でなにかあったの? 今日の彰一はなんだか、心配性すぎるというか、過保護というか……」

ううう、言ってて恥ずかしくなってきた。彰一が私に対して過保護なわけじゃないじゃない。言ったあとで後悔する。

「過保……!!!」

彰一も私の言葉が予想外だったらしく、大声を上げて狼狽えている。

そうして、口元を手で覆って黙り込んでいるけれど……あれ? なんだか耳が少し赤いような……?!

「おまえは仮にも藤園の人間だ。一族になにかあったら当主の……ひいては跡取りである俺にも責任がある。それだけだ!」

言うなりふいっと顔を背けて、窓の外の庭を見つめている。灯籠の明かりに映し出された庭では、青々とした楓の葉が優雅に揺れていた。

藤園。当主。跡取り。一族。故郷にいたころ息苦しく感じていた言葉の数々だ。彼の口から出た途端、それらがいまだに私を縛っていることを思い知り、気分が重くなった。

この家で気ままなひとり暮らしをして、大好きな雑貨に囲まれて仕事をして、気持ち

の赴くままに絵を描いて。毎日楽しくて、しがらみなんて全部忘れたと思っていたのに。「そうね、本家の意向は絶対だものね。わかった。彰一に任せるから好きにして。話はこれで終わり？」なら、私は自分の部屋に戻るから」

自分でも驚くぐらい事務的な冷たい声だった。

彰一がこちらを見ている気配を感じた。けれど、そのころにはもう立ち上がってドアへ向かっていたから、どんな顔をしていたのかはわからない。

「おい！」

焦ったような少し上ずった声が背中にかかる。けれど私はそれを無視した。

「——おやすみ」

それだけ言っただアを閉めた。

追ってこられたら厄介だなど思ったけど、その気配はない。そのことに安堵しつつ私は二階への階段を上る。

踊り場の明かり取りの窓にはステンドグラスがはまっている。四季折々の花が描かれていて、日中は階段の床に優雅な影を落としているけれど、いまはただ闇に溶け込んでいる。いつもはそれも綺麗だと思っただけれど、今日はまるで深海に沈んだ花のように寂しく見えた。

二 同居なんて冗談じゃない！

朝。望むと望まざるとにかかわらず、朝はやってくる。

カーテンの隙間から覗く朝日を恨めしく思いつつ、のそりとベッドから這い出した。パジャマがわりに着ているTシャツの、めくれたお腹を直して、自室のカーテンを開けた。日差しが目痛い。

うう、昨日は早めに寝たはずなのに、すっきりしない。

窓を開けると新鮮な空気がどつと押し寄せて、少しだけ目が覚めた。それと同時にお腹も目が覚めたらしくてぐう、と呑気な音を立てる。

とりあえずご飯を炊いて、卵があるから目玉焼きを作ろう。あと……冷蔵庫に野菜あったかな？ キュウリとトマトは少し残ってた気がするけど、レタスはどうかだったかなあ。

キッチンに向かおうと、部屋のドアをそっと開けた。廊下はいつも通りしんと静まり返っている。彰一はまだ寝ているみたい。静かなほうが断然いいので、寝坊はほとんどしていただきたい！ そう思いながら、部屋のドアを閉めた。

そーっと、そーっと。忍び足で廊下を進み、階段を下りる。
 ああ、よかった！ 階段を下り切ったところで、ほーっと胸をなで下ろした。
 階段を見上げれば、踊り場のステンドグラスは相変わらず美しい。いいねえ、いいねえ！

「おい」

「ぎゃあああああ！」

すっかり油断していたので、背後から声がかかったことに文字通り飛び上がった。
 飛び退りながら振り向くと、びっくり顔の彰一と目が合う。こっちに伸ばしかけた手が中途半端な位置で止まっている。ちよっと間抜けな格好だ。

「なんだよ、その悲鳴」

「誰のせいだと思ってるの、誰の！ そっちがうしろから急に声かけてくるのが悪いんじゃない！」

「うるさい」

ぶっきらぼうに言って、彰一はそっぽを向いた。

「えっと……その格好、どうしたの？」

シャツもパンツも泥だらけ。朝っぱらから、なにしてたのよ？

「ん？ ああ、これか。別になんだったっていいだろ、気にすんな」

「いちいち癩に障る言い方ね。ここの家主はまだ沙智子おばさまだし、私はそのおばさまから家の管理を任されてるのよ。この家で大きい顔はさせないわよ！」

腰に手を当てて宣言すると、彰一は面倒くさそうにこちらを一瞥し、廊下を歩いていく。

「ちよっと、そんな泥だらけで歩き回らないで！」

「……風呂、どこか教えろ」

「へっ!? あ、ああ……そうね。廊下の突き当たりを左よ」

家の中のものを色々と使わせるのは、一緒に暮らすことを肯定してるみたいで気が進まないけれど、家中泥まみれにされるよりはずっといい。彰一のことだから、私のお気に入りのソファにも、いまの格好のまま座りかねないし。

「わかった」

そう言って、彰一は二階に着替えを取りにいったしまった。

シャツの裾をつまんで、そおと歩いているのは……土が落ちないようにしてくれているのかな？ なんだ、ちよっとはいいところあるじゃない。

廊下に取り残された私は、ひとしきり感心してからキッチンに向かった。



「さあ、朝食作ろつと」

冷蔵庫の中身が乏しいから、大したもののは作れないけど、なんとかなるでしょう。なんて考えながらキッチンに入ると、炊き立てのご飯のいい匂いがする。

「え？ あれ？」

炊飯器を覗き込むと、炊飯中を示す緑のランプが、保温中を示すオレンジ色に変わるところだった。同時に炊き上がりを知らせるブザーが鳴る。

ピーピーというヒヨコの鳴き声みたいな音を聞きながら考える。昨夜は彰一とリビングで別れたあと、自分の部屋に直行してふて寝しちゃったから、炊飯器の予約はしていない。まさか夜中に寝ぼけて？ いや、ないないない。絶対ない！

「もしかして……？」

——彰一？ お坊ちやま育ちなアイツにご飯が炊けたんだ……！ 妙なことに感動しちゃった。

「やるわね、彰一」

眩いた途端、遠くで階段を下りる足音が聞こえた。おそらく彰一が、着替えを持つ

て下りてきたのだろう。

足音を聞きながら、ふと思いつく。そういうえばうちの給湯器は古いので、ちよつとコツがいるのだ。

「……………ま、いっか」

まず冷蔵庫の中身をチェックして、と。おお、レタスとキュウリとトマト発見。よかつた、これでサラダが作れる。卵の在庫も余裕。ラッキョー、ベーコンもある！ あれ？ ベーコンは切らしてたと思つてたけど、気のせいだったのかな。

まずはサラダから作りはじめた。

ひとりでは大きすぎるほど立派なこのキッチンには、動線がよく考えられているから動きやすい。

この家建てた人が住んでいたころは、ここで料理番さんや女中さんたちが忙しく働いてたんだろなあ。

持ち主が変わるたびにリフォームされてきたらしく、いまや当時の面影はほほえない。天井や窓の意匠にわずかに残っているだけだ。寂しい気はするけれど、人が普通に住むなら、特に水回りは不便だとつらいから仕方がない。

「よし！ サラダ完了！ あとは……」

フライパンで目玉焼きを作れば終わり。楽勝、楽勝！

ふふん、と得意げに鼻を鳴らした矢先、遠くから乱暴な足音が聞こえてきた。

「あ、やっぱり、上手くいかなかったか」

思わず悪役みたいな意地悪い笑みが漏れた。

上手いタイミングでレバーを回さないとボイラーに火がつかないのだ。で、そうならなかった場合、お湯が出るようになるまで長い時間がかかる。きつと彰一は、冷水を被ったんだろう。

引越してきた当初は、私もコツがつかめなくて何度も冷水を被った。そのときの苦い経験を思い出して、忍び笑いが止まらない。

突然押しかけてきて居座る宣言なんてしやがったワガママお坊ちゃまなアイツに、ちよつとした意趣返しだ。

「さやか！」

「なあに、そんなに慌てて。この家古いんだから、そんな乱暴にしないでよ。壊れちゃうじゃない」

素知らぬふりで廊下に向かって声をかけながら、熱したフライパンに油を垂らす。

そうして、せわしない足音が近づいてくるのを聞いていると――

「風呂、壊れてるぞ！」

と、大きな声が飛んできた。

立ち読みサンプル はここまで

「壊れてないよ。古いからちよつとコツがいるの」

ついでだから「彰一みたいなお坊ちゃまには不便な生活なんて無理でしょ？ やっぱりここには泊まらず、いまずぐ高級ホテルのスイートルームにでも予約を入れたら？」

くらしいの嫌味も言っちゃおうかな。なんて意地悪なことを考えながら、彼のほうを振り向いたんだけど……

「ぎゃあああああああ！」

口をついて出たのは、嫌味じゃなくて悲鳴だった。

「な、な、なんなの、その格好！ 服を着なさいよ、服を！」

とんでもないことに、彰一は上半身裸だったのだ。下はしっかりジーンズ穿いててくれてよかった……違う違う違う。ここは安堵するところじゃなくて！

「そんなことはどうでもいい。それより、風呂の給湯器！ コツがあるんだかなんだか知らないが、あれじゃ不便だろうが」

自分の姿を一向に気にしてないらしい彰一は、ほどよく引き締まった筋肉を晒してこっちに近づいてくる。

「ふ、不便じゃないよ？ 全然、不便じゃないもん！」

「嘘だね」